静岡県立大学
短期大学部
研究紀要 第 28 号
2014 年

保育実習指導における「学びの共有」の有効性
－保育実習を終了した学生と保育実習前の学生間での試み－

A Validity of “Sharing the Experience Learning” in Training for Internship of Child Care and Education
-The Trial Between Students who finished Training for Internship of Child Care and Education and Students who has not finished Training for Internship of Child Care and Education-

山本 学　　中澤 秀一
YAMAMOTO Manabu , NAKAZAWA Shuichi

要旨

本研究は、保育実習前の学生の実習に対する不安内容を明らかにすること、保育実習指導において保育実習を終了した学生のありのままの学びを直接、実習前の学生に伝える「学びの共有」を得る演習指導として試みることによって、どのような「学びの共有」が行われたのか内容を考察すること、さらにその有効性について明らかにするという３つを研究目的とした。

保育実習前の学生の実習への不安として最も多いのは、日誌の書き方と保育士との関係であり、指導案と部分実習にも不安を抱いていた。

「学びの共有」として多く挙げられていたのは、「あいさつの大切さ（誰にでもしっかりと）」、「手遊びをたくさん用意しておく」、「日誌を書くためのメモは子どもたちの前で取らず、キーワード、時間をすばやくメモすることが大切」、「日誌の今日のテーマは１日の始めに決めておくこと」、「急に、手遊び、絵本の読み聞かせをするよう言われることもある」、「子どもの名前は早く覚える」、「笑顔でいることが大切」、「体調管理が大切」と続いている。これはソーシャルワーク実習でも同じである。「学びの共有」としては、実習の実践面での学びが多く表れていた。しかし、教科担当教員には直接指導できない精神面での学びも表れていた。

Keywords: 保育実習、保育実習指導、学びの共有

Ⅰ．序論

日本では、厚生労働省の「指定保育士養成施設指定基準」[1] に基づき、指定を受けた大学、短期大学または専門学校等で保育士の養成にあたっている。「保育実習指導」科目はこの指定基準内の5系列のうち「保育実習」系列に位置する。そして、演習２単位とすることが定められている。

指定基準に示された「保育実習指導Ⅰ」の目標は５つある。特に、「2．実習の内容を理解し、自らの課題を明確にする。」では、学生はまず保育実習の内容を理解することが求められ、「4．実習の計画、実践、観察、記録、評価の方法や内容について具体的に理解する」では、保育実習の内容について具体的に理解することが求められている。

具体的に理解するために、様々な演習内容が養成校では実施されている。内容について検討した研究も数多い。長谷（2014）[2] では、保育実習後に学生に「設定保育（指導実習）の振り返りシート」を独自に実施していることを報告している。そして、その学びを分類整理及び分析し、保育実習指導の充実向上につなげている。また、中田（後藤）、柳瀬、渡邊（2014）[3] では、「共に育つ保育者養成」として、実習園からの評価を手がかりとした実習事前事後指導、学生からのフ

ィードバックを手掛りとした授業の展開方法とその可能性や課題、保育実習の関連性の３点について学びの連続性に注目して実践研究されている。

「保育実習指導」とは「保育実習指導Ⅰ」の目標１から４までの事前指導及び、「5．実習の事後指導を通して、実習の総括と自己評価を行い、新たな課題や学習目標を明確にする。」とあるように事後指導のための性格の両方を有している。つまり、「保育実習」を有意義に実施するための科目である。

先行研究においては、保育実習事後の学生の学びを教科担当教員が調査し、教科担当教員が実施する事前指導に結び付けているものがほとんどである。教科担当教員の研究というフィルターを通して、精査された事前指導は有意義なものであることは伺えるが、一度、保育実習を終了した学生の生の経験を加工したものとなる。保育実習を終了した学生のありのままの学びを直接、事前指導に活かした研究や報告は現状ではきわめて少ない。しかし、教科担当教員のフィルターを通さず、このありのままの生の声を保育実習前の学生に直接伝えることもまた有意義であると仮説を立てることができる。これを「学びの共有」を得る演習指導として、その有効性を検討することが必要とされていると考える。

Ⅱ．研究目的

本研究においては、以下の３つを研究目的とする。一つ目は、保育実習前の学生の実習に対する不安内容を明らかにすること。そして、二つ目として保育実習指導において保育実習を終了した学生のありのままの学びを直接、実習前の学生に伝える「学びの共有」を得る演習指導として試みることによって、どのような「学びの共有」が行われたのか内容を考察すること。三つ目は、その有効性について明らかにすることとする。

Ⅲ．研究方法

１．研究対象と実施期間

対象者：2014 年、S短期大学「保育実習指導Ⅰ」履修者 50 名

実施期間：2014 年 11 月４日（火）、11 月 10 日（月）５校時「保育実習指導Ⅰ」

２．授業内容

保育実習を終了した学生 14 名が、対象者 50 名とグループワーク形式で自由に質問や話し合いを行う演習とする。１回 90 分以内の演習を２回に渡って実施する。保育実習を終了した学生２名に対し、対象者 7-8 名のグループに分かれる。グループは７つ作られる。１回ごとに対象者を交換することで、計４名の保育実習を終了した学生と「学びの共有」を行う。

３．調査方法

質問紙調査（自記式留め置き）で、回答方法は、記号選択と自由記述の複合とする。内容は、保育実習前の不安の内容、保育実習を終了した学生への質問内容、演習終了後の学びについての３項目である。特に記号選択の内容作成のため、面接調査法で３名に事前調査を行い、質問紙を作成した。回収率は、62.0%(31名) であった。

4．倫理的配慮

口頭、書面にて研究への使用を説明した。参加は自由意思であること、参加の拒否や同意後の撤回の保証と不利益は生じないことなどもあわせて説明した。プライバシーと個人情報の保証と、データは匿名とし、個人が特定できないように取り扱った。

また、本研究は、静岡県立大学の研究倫理講習の内容に反しないものであることをここに述べておく。

5．分析方法

（1）保育実習前の不安の内容、（2）保育実習を終了した学生に質問した内容、（3）演習終了後の学びの内容を集計する。（2）と（3）については、それぞれ自由記述のため、内容を分類整理し、カテゴリー化する。それぞれ表れた結果を考察する。

Ⅳ．結果と考察

1．保育実習前の不安の内容

表 1 実習前の不安の内容

	内容	回答数
ア	なにが不安かわからない	3
イ	園の様子がわからないことによる不安	4
ウ	日誌の書き方	25
エ	指導案	22
オ	部分実習	21
カ	保育士との関係	25
キ	子どもとの関わり	14
ク	保護者との関係	9
ケ	体調管理	3
コ	手遊び	4
サ	ピアノ	17
シ	壁面構成	4
ス	読み聞かせ	3
セ	気になる子との関わり	4
ソ	積極的に取り組むことができるか	10
タ	機敏に動くことができるか	12
チ	不安はない	0
その他	服装 1、保育士にどの程度求められているのか 1、実習中に困ったこと 1	1
無回答		1

最も多いのは、「日誌の書き方」と「保育士との関係」であった。実習日誌をまだ実際には書いた

ことがないことや、現場の保育士との関わりを経験していないことから表れた結果と考える。尾崎、長廣、加藤（2003）[4] の保育職への意欲の研究によると、「設定保育がうまくいったか」といった実習内容の成果よりも、「子どもに積極的に関わることができたか」、「担任の先生との人間関係がうまくいったか」といった要因が関連することが報告されている。ここでは、保育職への意欲とは異なるが、実習先の指導者との人間関係への不安が同じく表れていて、重要な結果であると考える。

また、「指導案」と「部分実習」にも不安を抱いている。これは尾崎、長廣、加藤（2003）の「子どもに積極的に関わることができたか」にも表れている。「子どもとの関わり」は、「ピアノ」に次ぐ不安の内容となっていて、保育者や子どもとの関わりが重要であることがここに表れている。

「ピアノ」に関しては、経験が足りない学生が多いことがその要因として考えられる。

2．保育実習を終了した学生に質問した内容

表 2 保育実習を終了した学生に質問した内容

カテゴリー	内容	回答数
実習日誌（13）	日誌の書き方	12
	日誌の提出	1
指導案、部分実習（14）	部分実習の内容	12
	指導案の書き方	2
服装（11）	服装	9
	エプロン	2
保育士との関係（6）	実習先の保育士との関わり方、接し方、どのような指導を受けたか	4
	実習先の保育士との連携	1
	実習先でどのような指導を受けたか	1
保育表現技術（7）	ピアノは弾いたか	6
	壁面構成	1
子どもとの関わり（7）	子ども同士のケンカの対応	3
	子どもが怪我をしたときの対応	1
	子どもが泣いているときの対応	1
	子どもの午睡への対応（寝てくれない子どもへの対応 1、起こし方 1）	2
その他	どんなことに注意をしたらいいか	1
	実習事前打ち合わせの内容	1
	相談	1
	無茶振りの対応	1
	実習の大変さ	2
	困ったときの対応	1
	休みの過ごし方	1
	保護者との関係	1
	持ち物	1

その他	実習でうれしかったこと	1
	朝、何分前につけばよいか	1

保育実習前の不安で多くあがっていた実習日誌や指導案、部分実習について質問をしていた。しかし、保育実習の不安とは異なる点として、服装についても質問が表れている。

「学びの共有」で共有されていた内容は、実習日誌、指導案、部分実習、服装などの実践的な内容である。

3．演習終了後の学びの内容

表３ 演習終了後の学びの内容

	内容	数
実習日誌	日誌の書き方のこつやポイントの押さえ方	2
	日誌を書くためのメモは子どもたちの前で取らず、キーワード、時間をすばやくメモすることが大切	9
	メモ帳はページを開いておけるリング型がよい。	1
	日誌は慣れないと３時間くらいかかる。だんだん慣れていく	4
	日誌は早い時間に出す	1
	日誌の今日のテーマは１日の始めに決めておくこと	9
	日誌や実習の課題はあらかじめ決めておく	3
	日誌は時系列に書いた方が書きやすい	6
	日誌は他の人が読んだときにわかりやすく書く	2
	日誌はボールペンで書く	3
	日誌は～させる、～してあげるの表現は使わない	2
	日誌では言うではなく声をかけるという表現を使う	1
	日誌の修正の仕方を聞いておく	3
	日誌は帰ったらすぐやる	8
	０歳児クラスの日誌は、生活、養護について書く	2
	０歳児クラスの日誌は、排泄や食事について書く	3
	日誌は毎日提出する	2
	日誌は日ごとにばらばらで提出するので、クリアファイルを12枚用意しておく	8
服装、身だしなみ	部屋履きは体育館シューズがよい	2
	部屋履きは上履きがよい	1
	化粧はしない	2
	マスクをすることは大丈夫だった	1
	マスクをすることはきちんと確認した方がよい	5
	エプロンは2枚用意する	3
	エプロンはなるべくたくさん用意する	2
	エプロンは毎日洗う	1
	エプロンには名前をつける（ぬっておく、マジックテープや安全ピンはだめ）	7
	フード付きのパーカーがよいかどうかは園による	5
	エプロンにポケットティッシュ、ハンカチ、メモ帳、ボールペンを入れておく	6
	服装でキャラクター物を禁止している園もある	2
	実習中はジャージ	4
	ジャージ下の足についている金属部分に注意する	3

服装、身だしなみ	髪は1つにまとめる	1
	髪の毛はしばる	1
	髪の毛はおだんごがいい	1
	汚れるので着替えを用意しておくとよい	3
	1 日見学にはジャージを持っていく	1
	通勤の服装を聞いておく	1
オリエンテーション	オリエンテーションはスーツでいく	5
	オリエンテーションで通勤と実習中の服装を必ず確認する	7
	オリエンテーションで質問することを考えておく	4
	オリエンテーションで質問できること、不安なことは聞いておく	6
	オリエンテーションでは必ずメモを取る	1
	オリエンテーションでは絵本について聞いておく	2
	オリエンテーションで部分実習について相談しておく	4
	オリエンテーションでピアノを弾くことがあるか、何を弾くか聞いておく	1
	オリエンテーションで理念、職員人数、理念を確認しておく	3
指導案・部分実習	部分実習は早めに相談しておく	1
	指導案は早めに提出する	1
	部分実習案は事前にいくつか考えておく	4
	部分実習案は乳児で 1 つ、幼児で 1 つ考えておく	1
	部分実習は見せるものがうまくいきやすい	1
	2 月の実習では忙しくて、部分実習をやらせてもらえなかった	1
	遅い子にあわせると全体がうまくいかない、バランスを考慮する	2
	子どもの集中力をよく考慮する	2
	部分実習は乳児よりは幼児の方がやりやすかった	2
	部分実習は 4 歳児がやりやすかった	4
	部分実習では手遊びがうまくいった	1
	部分実習では手遊びの後に絵本を読んだ	1
	部分実習は自分の得意なものをやるのがよい	2
	部分実習はあらかじめ計画しても、その通りにはいかないので臨機応変に対応する	5
保育表現技術	急に、手遊び、絵本の読み聞かせをするよう言われることもある	9
	手遊びをするにも入り方が重要	1
	手遊びの特徴をよく把握しておく、年齢別によく覚えておく	4
	手遊びをたくさん用意しておく	11
	子どもが知らない手遊びをやっても大丈夫だった	2
	手遊びは長くないものの方がよい	1
	手遊びは乳児にはひげじいさんがうまくいった	1
	手遊びはキャベツの中からをやった	1
	手遊びは 1 対 1 でもコミュニケーションに使える	4
	ピアノより手遊びを使うことが多い	1
	ゲームを考えておく	2
	切る作業はあまりうまくいかなかった	1
	あずきを使ったマラカスは、保護者にとっては食べ物を粗末にすることとして気になる、食べ物を使うときは保護者のことも考える	2
	ペープサートは子どもの表情を見られないので難しい	3
	実習前にたくさん絵本を読んでおく	1
	実習前に絵本を借りておく、絵本は園で借りずに自分で用意しておく	4

保育表現技術	絵本は暗記しておく	5
	絵本は季節やクラスで流行っているものを考慮する	3
	絵を描くことは個人差が出てくる	1
	紙芝居は予習しておく	1
	紙芝居は難しい	1
	ピアノや絵本をするときは子どもの方をよく見る	1
	ピアノはできていた方がいい、やっておいた方がよい	2
	ピアノは実習で弾くと勉強になる	1
	ピアノはあまり弾かなかった	2
	ピアノは弾かない	1
	ピアノは園から楽譜を渡されることもある	1
	手遊びや読み聞かせは積極的にやらせてもらう	3
保育士との関係	あいさつの大切さ（誰にでもしっかりと）	13
	「よろしくお願いします」を言えるようにしておく	3
	集合の10分前に着いておく	1
	集合の15分前に着いておく	3
	指定された時間より早く行く	1
	5 分前につくようにする	1
	礼儀をきちんとする	2
	積極的な参加を心がけることが大切、待ちの姿勢はだめ	5
	ぼんやり立っているだけはだめ	2
	進んで「なにかお手伝いすることはありますか?」と聞く	8
	自分から何をしたらいいか聞く	4
	わからなかったら聞く	8
	なんでも聞く	2
	わからないことなどはなるべくその場で聞くことが大切	3
	わからないことが聞けない場合も多い	4
	遊んでいるとき他の先生が給食の準備をしだしたら手伝う	1
	他の保育士の行動をよく見ておく	4
	他の保育士のことばがけをよく勉強する	1
	特にケンカの仲裁のときの他の保育士さんの対応をよく見ておく	1
	そうじをしていたら「先生代わります」など状況を見て自分でできることを探す	2
	そうじをしっかりやる	5
	そうじをするときは、子どもがいない方向にする	3
	保育士さんごとに違う注意があることがあるが、その保育士さんに合わせる	3
	保育士さんは「先生」をつけて声をかける	1
	先にお昼をいただくときは「お先にいただきます」と声をかける	6
	帰るときもあいさつをする	5
	保護者にきちんとあいさつをする	4
子どもとの関わり	子どものけがは、保育士さんに報告する	1
	子どもの名前は早く覚える	9
	キャラクターの知識があるとよい	3
	ひたすら鬼ごっこをした	1
	おもちゃの取り合いに直面したときは、他の遊びに誘う「お姉さんとこれしようか」	4
	けんかになったときは小さい子ほど安全を確保することが大切	5
	泣いている子がいたらすぐ「どうしたの」と声をかける	2

子どものとの関わり	泣いている子がいたら近寄って共感してあげる	5
	子どもには共感をしてあげる	2
	子どもに嫌いといわれても気にしない	3
	子どもに叩かれたら、やめてではなく痛いな、いやだなと自分の気持ちを伝える	4
	子どもと約束したら必ず守る	5
	子どもは注意しても聞かないことが多い	1
	ひざ立ちは子どもが足を引っ掛けることがあるので危険である	1
	手を後ろで組むことはよくない	1
	子どもの表情をよく見る、一人ひとり表情をよく見る	2
	子どものアクションに反応する	3
	いろいろな子に話しかける、関わる	7
	よってこない子には自分から関わる	1
	いろいろな場所に移動して、いろいろな子どもを見る	1
	子どもが多いほうに背中を向けない	2
	外遊びでは子どもが見渡せる立ち位置を考える	4
	特定の子だけに何かするのはよくない（景品など）	1
	全体を見て子どもの安全に配慮する	4
	鬼ごっこなどゲームは必ずルールを守らせる	3
	自分も動いて子どもたちとよく遊ぶことが大切	4
	全部やってしまうのではなく、子どもに質問して考えてもらうことも大切	4
	午睡でなかなか寝ない子がいたら、保育士さんに聞く	3
	午睡で話しかけられても、うなずくだけにする	4
	午睡から起きない子には、おやつの話が有効だった	2
	子どもとの対応で迷ったら保育士さんに相談する	4
	子どもにけがをさせないことがとても大切	3
	2 月の実習はクラスができあがっているので、人見知りが激しかった	3
年齢別の子どもとの関わり	どの年齢クラスからでも始められる場合は、最初は 0 歳児からがおすすめ	4
	いろいろな年齢のクラスを回らせていただく	4
	子どもの月齢を確認しておく	2
	子どもの年齢の発達をよく観察する	2
	0 歳児にもしっかり話しかける	2
	乳児には危険がない遊びをする	1
	乳児にはおむつ替えや、トイレ介助をする	3
	2 歳児は「イヤイヤ」が多い	2
	3 歳児には競争はさせない方がよい	4
	3 歳児には切る作業はむずかしい、集中力もない	1
	3 歳以上の幼児とは一緒に遊ぶ	1
	4 歳児以下に切る作業はやらせない方がよい	3
	4 歳児は近寄ってきてくれる	1
	5 歳児は見守ること主体に関わる。	2
	5 歳児はとてもデリケートである	2
	5 歳児には悪態をつかれることがある	6

実習全般	手順をしっかり考える	1
	予想外のことはとても多い	1
	他の養成校の実習生のやり方にまどわされないで、自分のペースを保つ	2
	一日の流れを把握する	1
	保育園の方針をよく理解しておく	4
	笑顔でいることが大切	9
	自分のはさみやのりやホチキスを用意しておくとよい	1
体調管理など	頑張りすぎない、無理をしない	2
	体調管理をしっかりしておく	9
	早めに寝ないと体がもたない	4
	体力をつけておく	1
	声がかれやすい	1
	3日目から体調を崩しやすい	2
その他	学校では学べないような保育園での様子や保育士との関わりを学べた	1
	園によってまったく違うことがある	5
	かたくならず、楽しみながら実習を行う	2
	前向きに考える	2
	最初はうまくいかないのは当然	3
	先輩の話を聞いて気持ちが少し楽になった	2
	様子が少しわかったのでよかった	1
	とてもためになった	1
	反省はしても、毎日落ち込んでいたら自分自身がもたない	1
	実習書類の手続きをよく確認しておく	3
	実際の日誌を見せていただいたことが勉強になった	1
	先生の立場ではなく学生の立場から聞いた体験談がとても参考になった	5

2回に渡る演習内容で、対象者が学んだことは表3の通りである。最も多くの対象者が勉強になったと回答したのは、「あいさつの大切さ（誰にでもしっかりと）」（13名）である。続いて、「手遊びをたくさん用意しておく」（11名）、「日誌を書くためのメモは子どもたちの前で取らず、キーワード、時間をすばやくメモすることが大切」、「日誌の今日のテーマは1日の始めに決めておくこと」、「急に、手遊び、絵本の読み聞かせをするよう言われることもある」、「子どもの名前は早く覚える」、「笑顔でいることが大切」、「体調管理が大切」（9名）となっている。保育技術内容について、対象者が不安に思っていたことは、ピアノの方が多かったが、保育実習を終了した学生との「学びの共有」では、手遊びの方がより多く表れていた。表3では、「学びの共有」としては、保育実習の実践面での学びが多く表れていた。

V．ソーシャルワーク実習との比較

S短期大学では、保育実習とともに社会福祉士養成の関連科目として「ソーシャルワーク実習指導」および「ソーシャルワーク実習」が開講されている。本章では、ソーシャルワーク実習における、実習前の学生の実習に対する不安内容や、実習を終了した学生と実習前の学生との「学びの共有」について述べたい。

1．実習前の不安の内容

ソーシャルワーク実習において学生が実習前に抱えている不安は、保育実習と同様に「日誌の書き方」や「指導者（職員）との関係」もあるが、最も大きな部分を占めるのは「利用者との関わり」である。一部の学生はボランティアの経験があるが、多くの学生は援助を必要とする高齢者や障害者、児童などとコミュニケーションを取った経験が少ない。授業で学んだ理論や援助技術が、現場どのように実践されているかは、実際に経験しなければ分からないものであり、「利用者との関わり」が不安要素となるのは当然のことであろう。

2．学生の「学びの共有」

ソーシャルワーク実習でも「ソーシャルワーク実習指導」にて、実習を終えた学生とこれから実習に臨む学生との合同授業（1 回）を実施している。保育実習と同様にグループワーク形式で行い、高齢・障害（知的・身体）・児童・機関（社協・病院・福祉事務所）などの領域ごと小人数のグループに分かれて、自由に質問や話し合いを行い「学び」を共有している。

この合同授業の前に、実習を終えた学生たちは合同授業に向けた準備を行っている（1 回）。そこでは、自らが実習前に抱えていた不安内容を思い出して、「実習日誌の書き方」「服装、身だしなみ」「援助技術」「指導者との関係」「利用者との関わり」「体調管理」など、項目ごとに話す内容の整理を行っている。

学生の立場からの体験談が、教科担当教員の指導から生まれない安心感を（実習前の）学生たちにもたらしていることは、合同授業を終えた学生からの感想からも伺える。

Ⅵ．まとめ

1．保育実習指導における「学びの共有」の有効性

保育実習指導における「学びの共有」は主に実践面で表れていた。しかし、表 3 の「その他」カテゴリー内にあるように、対象者の学びは、「前向きに考える」、「最初はうまくいかないのは当然」、「先輩の話を聞いて気持ちが少し楽になった」、「様子が少しわかったのでよかった」、「とてもためになった」、「反省はしても、毎日落ち込んでいたら自分自身がもたない」など精神面も表れている。実習を終えた直後であり、同じ学生という立場から話し合いを行うことで得られた「学びの共有」には、「先生の立場ではなく学生の立場から聞いた体験談がとても参考になった」のように教科担当教員では指導できないものもある。ここでの保育実習指導における「学びの共有」の有効性は、実践面はもとより精神面もあると考察する。

2．今後の課題

本研究においての保育実習指導における「学びの共有」はまだ試みと検証の段階である。演習内容にはまだ工夫の余地があり、また、生の学びを直接、実習前の学生に伝えることで生じる問題点についても検証していない。これらについては、今後の課題としたい。

Ⅶ．文献

1．引用参考文献

1） 指定保育士養成施設指定基準（平成 25 年 8 月 8 日雇児発 0808 第 2 号厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知）．2013

2） 長谷秀揮．保育実習Ⅱにおける学生の学びについての一考察．四條畷学園短期大学紀要．2014，47，pp.59-65

3） 中田（後藤）範子，柳瀬洋美，渡邊眞理．『共に育つ保育者養成』の探求２―保育実習Ⅱ（保育所実習）に向けた保育実習指導のあり方―．東京家政学院大学紀要．2014，54，pp.9-23

4） 尾崎恭子，長廣真理子，加藤泰彦．保育所実習が保育者志望の意欲に及ぼす影響について．中国学園紀要．2003，2，pp.67-73

（2014 年 11 月 28 日 受理）